

島口 健次 厚木の道祖神信仰について

厚木には道祖神を祀る地点が 184ヶ所もあり、県内一と言われている。

道祖神に対する信仰は非常に根強いものがある。厚木の道祖神（サイノカミ）信仰は中世に遡ることが推測できるが、石造物という形で道祖神を確認出来るのは江戸時代の中期である。この道祖神の多くは船形光背型で双体又は単身の彫像を施したものである。そして角柱型の道祖神が中心となっている。この他には自然石が加工され碑にもなっている。

道祖神を祀る場所には石塔や碑の他にも様々な石造物を見ることが出来る。最も多いのが中世後期の所産と思われる五輪塔、宝篋印塔の部分である。特に厚木の七沢地域ではこれら中世石造物を伴っている割合が高く、これら自体を祭祀対象として道祖神行事を行っている事例が見られる。道祖神に対して行われる祭祀行事は地域ごとに多種多様であるが、その主たるものは正月飾りなどを集めて燃やす火祭り行事である。「アクマハライ」と呼ぶ事例もあり、除疫を祈願しての行事である。この火で焼いた団子が風邪や虫歯などの病気予防になるとし、また焼け棒杭が火難除けになるといった伝承もある。

道祖神は小正月のだんご焼き行事などでその名を知られているが、いったいどんな神なのか。柳田國男、折口信夫らの民俗学者も研究しているが、弘文堂「神道事典」（国学院大学日本文化研究所編）では「集落の外部から侵入してくる疫病や災害などの災厄をもたらす邪霊・悪神を防ぐために村境や辻に祀られる神である。塞の神、道陸神、石神などと呼ばれ、神体は陰陽石や丸石のこともあれば、男女二体の石像のこともある」としている。

厚木の庚申信仰について

厚木には庚申塔が市内全域に約80ヶ所もあり、その信仰がある。庚申塔というのは大概是比較的大きな角塔の一面に青面金剛という恐ろしい明王像を浮彫りしている。この像の下には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が彫り出されている。元々この庚申信仰は暦の上の庚申の日人間に体内に住んでいる三尸（さんし）の虫が、寝ている間に体内から抜け出し天に上り、天帝にその人の日頃の行状を報告する。その結果、罪状によって寿命を断ち切られたり、縮められたりするということである。何とかこれを防ぐために庚申の夜には、寝ずに行いを正して過ごすのが「夜中待ち」と呼ばれる祭りだとされている。

この庚申信仰は柳田國男、折口信夫らの民俗学者によると、江戸時代中期から盛んになったとされ、厚木地方では戦前までは頻繁に行われていたと言われる。神社や寺院などには庚申堂が今でも数多く残っている。また厚木の東部では路傍に庚申塚が数多く散見される。庚申信仰の対象であるが、おおむね神社の場合には猿田彦、寺の場合には青面金剛に固定化されている。その両方があくまで主軸であるが、実際には諸神諸仏や民間信仰などが複数に習合されている。庚申の申は「さる」と読み、そこから神道の猿田彦と習合した。仏教と結びついたのが疫病退散に効験があるとされた疫神の青面金剛である。明治維新まで日本は神仏習合が普通であったため両者が共存していたのであるが、廃仏毀釈によって分離された経緯がある。